

### 3 マルチ栽培によるレタスの連続2作穫り施肥技術

#### ねらいと成果

レタスの土壌病害対策として太陽熱消毒を行う際、基肥を施用し、成畦と同時に熱線を透過する特性のある紫色フィルムでマルチを張る。消毒後、処理層を壊さずそのままの状態レタスを定植する。この栽培法を可能にするためには、肥料を全量基肥で施用する技術が必要となる。ここでは、有機物と緩効性肥料を窒素成分として20~30kg/10a施用することにより、レタスを連続2回作付けし、安定した生産と効率的施肥が可能になることを明らかにした。

#### 内容

作業体系は、水張りまたは緑肥作物のすき込み後、堆肥散布に続いてレタス2作分の施肥を緩効性肥料の全量基肥として施用し、成畦後に雑草抑制と地温上昇効果のある紫色フィルムを用いて太陽熱処理を約1か月続け、その後そのままマルチとして利用し連続2回定植を行う(図1)。

肥料の種類については、SL(NPK:14-12-14、220日肥効調節型被覆肥料)で初期のECは低く抑

えられ(図4)、窒素成分量は20~30kg/10aで1、2作目とも球の肥大が安定した(図2)。SIB(NPK:15-16-12、120日型粒状肥料)および慣行(有機肥料:化成肥料=7:3)は、高温での溶出が早まり初期のECが高く、濃度障害や球形の乱れをまねく傾向がみられる。慣行無マルチ区は、ECが低く流亡が著しい。

ほ場条件としては、連年、毎作堆肥を2~3t/10a施用している腐植に富んだ場で生育、収量、品質とも良好となる(図3)。堆肥を施用していない場では1、2作とも生育が劣ることから、太陽熱消毒による地力の消耗を防ぎ、施肥量を抑えるためにも緑肥作物のすき込みや堆肥の散布など有機物の補給を行うことが大切である。

#### 今後の方針

土壌分析では、リン酸やカリの集積がみられるため、窒素成分主体の緩効性肥料の施用を検討する。

小林 尚司(淡路農技・農業部)

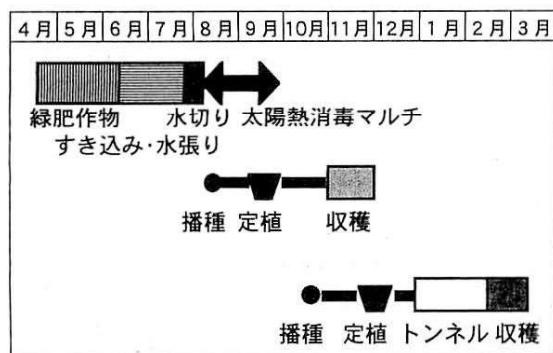


図1 作業体系

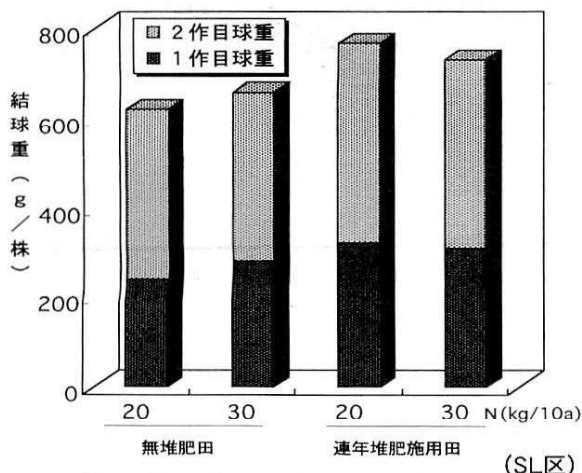


図3 堆肥の有無・施肥量がレタスの結球重に及ぼす影響

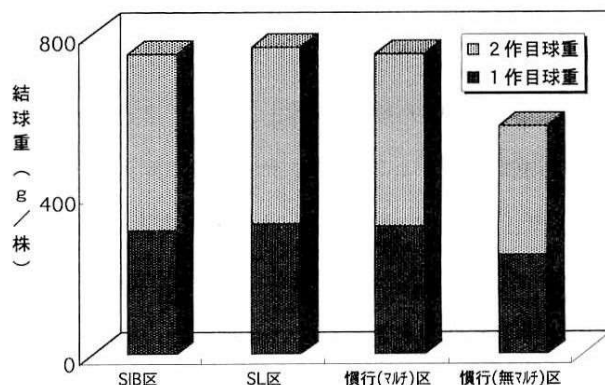


図2 肥料の種類がレタスの結球重に及ぼす影響(N20kg/10a)

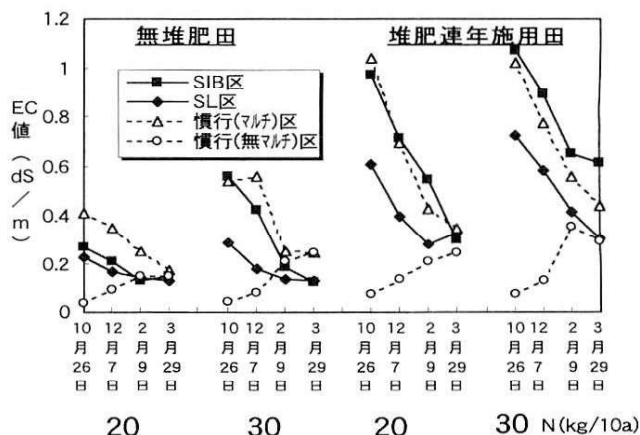


図4 土壌ECの経時変化